硫黄島レポート　3412810055　　遠藤　公志郎

今回、硫黄島に１泊２日で宿泊実習をおこなったが、鹿児島ならではの離島での生活を送っていくうえでの感じたメリットおよびデメリットについて考えた。

まず、デメリットだが亜硫酸ガスを含む風や酸性土壌といった点だ。硫黄岳から吹く亜硫酸を含む風により作物が枯れたり牧場の施設の老朽化したりといった問題となっているという話があった。私は、島を活性化させるために必要なのは雇用だと考えている。その雇用を島において増加させるためには、漁業や農業が重要だと考える。今回、漁業については見学や話を聞くといった機会はなかったものの港に漁船が一隻しかなかったことからもあまり盛んでないことが考えられる。これは、漁業は専門ではないため詳しくはわからないが、輸送の点において腐敗しやすい魚は困難といった点があげられるのではないだろうか。農業におい土地は、島をまわって観察した時にところどころ農業ができそうな土地が目に入った。あとは、亜硫酸を含む風と酸性土壌の問題をクリアすれば十分可能だ。具体案としては、酸性土壌に対し適する作物の導入、また亜硫酸ガスにおいては施設栽培を行うといった策がある。施設栽培は、資材費および資材の輸送費が経営を圧迫するならば亜硫酸ガスの影響を受けにくく酸性土壌に適した作物をさがし農業を盛んにすることで雇用が生まれ島が活性化するのではないかと考える。この適した作物においては、ブルーベリーが適するのではないかと考える。ブルーベリーは代表的な好酸性植物である(玉田ら 2000.)。こういった点から最適だと考えられるが、休眠打破の問題が発生する可能性もある。特産農産物が生まれれば、特産品にもつながる。そういう点で、このデメリットを解決し農業を盛んにしていくことが重要ではないかと考えた。

メリットは、自然、文化の素晴らしさである。まず、個人的に今回の一泊二日という短

い滞在期間ではあったが、最高に有意義で楽しい時間を過ごせた。宿泊施設を見学したときの話で「硫黄島は不便だ」といった内容を雑誌に書かれたという話がでたが、なんら不便な点はなかった。むしろ、そこがいいのではないだろうか。普段は、ビルに囲まれ、車がひっきりなしに道を走り、夜は電灯のあかりがどこにでもついている都会では、心が貧相になる。しかし、硫黄島は広大な自然、きれいな海(港の赤い海は綺麗というより珍しい)、また夜には真っ暗で空は星で敷き詰められていた。こういう土地で、何日か過ごすことでどこか心が癒され同じ毎日

がすがすがしく感じられると思った。ちなみに、毎日同じといった考えは、自然が居住区から減ったことが問題だと考える。ビルの立ち並ぶ街では一日一日が全く同じか、さほど変わらない景色だ。しかし、硫黄島のように自然に囲まれた土地では、日々かわっていく自然を感じることができる。また、硫黄島は東温泉、俊寛堂、新硫黄島、クジャク、硫黄岳などの多くの観光スポットもあり存分に楽しめることができる。そのなかでも、ジャンベは印象的だった。昔から、硫黄島にあったわけではなかったものの、いまは硫黄島の文化といっても過言でないほど根づいている。島にはジャンベスクールがあり、祭りではメインイベントとなり人々がジャンベにあわせ踊っていた。このような島はめずらしいと思う。

今回、この講義を受講するまでは十島村の存在は知らなかった。鹿児島において島と言えば奄美大島と屋久島といったイメージだ。これは、非常にもったいない。もっと十島村、硫黄島のことを世の中の人に知ってもらいたい、そして訪れてほしい。そのためにも、このような講義や国際島嶼研究センターはとても重要だ。島国と呼ばれる日本において、離島の自然、文化はすばらしいと今回の宿泊実習で感じた。